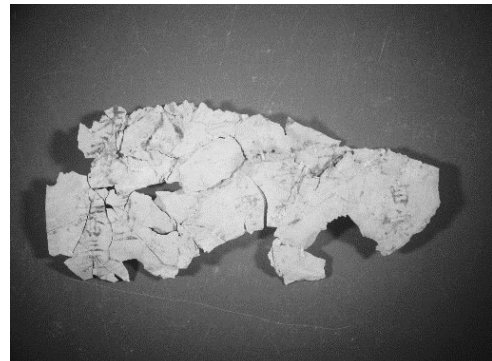


## 「赤外線カメラでわかった漆紙文書の発見と解説」 史跡出雲国府跡（松江市）

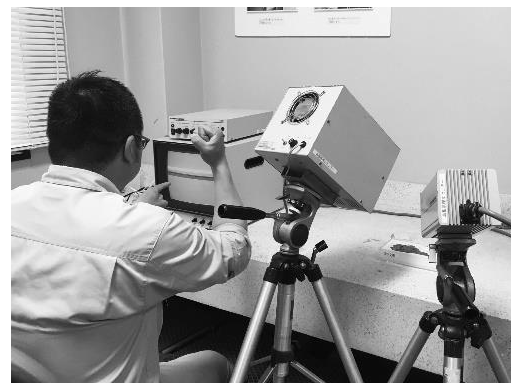
調査年：平成 2009 年（平成 21）年 神柱靖彦

埋蔵文化財調査センターの一室でモニターをのぞき込んでいた私は、興奮のあまり思わず「見える、見える！文字が見える！」と大声を上げていました。そのとき私は調査を担当していた出雲国府跡から出土したある遺物に赤外線発生装置から赤外線を当て、それを赤外線カメラで撮影していたのでした。赤外線は可視光よりも波長が長いので、遺物に当てることで肉眼では把握できない文字等を見ることができるのです。その遺物とは茶色のなめし皮のような非常に薄い膜状の遺物で、発掘調査事務所での洗浄作業により付着した泥が落とされ、その形状から「漆紙文書」である可能性が把握されたのです。ただし、文字の有無は肉眼では確認できないことから、埋蔵文化財調査センターで赤外線を用いた確認作業を行ったのでした。

さて、漆紙文書とは古代の役所で書かれた文書等が古紙として漆工房へ払い下げられ、漆容器の蓋として使用されたものです。このうち漆がしみこんだ部分が強化され、風化をせずに遺跡から出土します。漆紙文書が出土した出雲国府跡は、松江市大草町に位置する古代の出雲国の中枢であった官庁街の跡で、国の史跡に指定されています。この年の調査で出土した漆紙文書は3点で、瓦などを廃棄した穴から出土しました。専門家のご指導により、漆紙文書のうち2点は帳簿形式の文書で「延暦三年」という



出雲国府跡出土の漆紙文書（死亡帳の一部）



赤外線を使った調査状況

年号や人名と思われる「未麻呂」、年齢を示す「年六十一」等の文字が書かれていることが判明しました。その他の1点は判読できる文字が少ないものでしたが、文字の大きさやその間隔から書状であると推定されています。

また、帳簿形式の2点の漆紙文書は延暦三（784）年ごろの「死亡人帳」であると考えられています。「死亡人帳」とは一年間に死亡した人名のリストであり、出土したものは出雲国内の各郡で作成された死亡人帳をまとめて統合したものだと言われています。この漆紙文書の発見は出雲国府で行われていた文書事務を具体的に示す貴重な発見となりました。

肉眼では把握することのできない古代の役人が書いた文字を確認できたことで、センサー自慢の赤外線カメラの面目躍如となる発見になりました。

（島根県埋蔵文化財調査センター企画員）

### 【ひとくち情報】

漆紙文書の出土は漆の生産や利用が盛だった東日本の遺跡からの例が多く、中国地方では島根県以外ではこれまで出土例がない。出雲国府跡の漆紙文書の発見は、漆を利用した工房に生産体制を考える上でも重要な発見であったといえる。